

# 怒りの直接表出表現「ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク」の意味分析

馬場典子\*

キーワード: 怒り, テイル形, 報告性, 感情主, なわばり

## 要旨

怒りを表す表現の中でも「ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク」は基本形単独で怒りを直接表出でき、また補語を取る場合も基本形で表せるという共通点を持つ。本稿ではこの3語(句)を共時的に分析し、各語(句)の意味・用法の類似点・相違点を明らかにすることを目的とした。そして「テイル形の「報告性」(柳沢 1994)と「情報のなわばり理論」(神尾 1990)を援用することにより、3語(句)が品詞上は感情形容詞と連続的であり、中でも「ハラガタツ」が最も感情形容詞的な性質であることを指摘した。またこれら3語(句)は動詞の性質上、状態動詞と連続性があることが明らかになった。さらに類義分析で「ハラガタツ」が怒りの対象に「自分」を取り、内省的な怒りを表すこと、「アタマニクル」だけが副詞「ついに」と問題なく共起し、怒りの生起の瞬間に着目する表現であること、「ムカツク」が生理的な類似性に基づくメタファー的表現であることを確認した。

## 1. はじめに

「ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク」は怒りを表す表現の中でも、補語を伴わない単独表現の場合(「ああ、ハラガタツ!」)も、また補語を取る場合(「～にハラガタツ」)も基本形で表せるという共通点を持つ。これらの動詞および動詞的なふるまいをする句(以下「動詞(句)」)というに関する先行研究には、社会言語学的立場からの記述(竹内 1997)、品詞分類の観点からの記述(寺村 1982)、および個別的な意味記述(宮地編 1982; 倉持 1986)がある。しかしこれら3語(句)の性質上の共通点に着目した上で、包括的な意味記述が行われているものは管見の限りない。よって本稿ではこれらの3語(句)が日常的発話上どのように用いられているかを統語的意味的観点から考察し、各語(句)の性質を明らかにする。その上で改めて個別的な分析を行い、各語(句)の特徴を記述する。

\* BABA Noriko: 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程。

## 2. 個別的分析の前に

分析対象語(句)の個別的分析に入る前に、より妥当な語義の記述に向けて、本稿での考察範囲および感情を表す動詞(以下「感情動詞」という)に関わる諸問題について整理しておく必要がある。

### 2-1. 考察範囲の設定——使用するテキストの種類——

本稿では、使用するテキストを日常的対話や報告文(雑誌, 新聞記事)に限定し、いわゆる「語り」および「体験的ノンフィクション」のテキストを対象外とする。その理由を以下に述べる。まず、小説や地の文に見られる「語り」のテキストにおいては人称制限の解除が行われることが金水(1989)で指摘されており、さらに「語り」に見られるテンス・アスペクトが「報告」(金水1989)や「対話(はなしあい)」(工藤1995)のものとは異なっている。また、紀行文、自叙伝のような「体験的ノンフィクション」は、話し手が作中人物の視点で事態を捉えているため、その性質は「語り」に近いものである。従ってこれらのテキストは、「日常的発話レベルにおいて分析対象語(句)がどのように使用されているか」を観察・記述することを目的とする本稿の趣旨からは除外される。

### 2-2. 感情動詞に関わる諸問題

#### 2-2-1. 「主体」の概念について

本稿では従来「主体」と言われてきたものを、「感情主(=感情を持つ主体)」と「報告者(=感情主の感情を観察して報告する人)」に分けて考察することを提案する。1人称主体の場合は、感情主も報告者も同一であるが、3人称主体の場合は、感情主と報告者は別になる。

#### 2-2-2. テイル形に関する考察

##### (1) 感情動詞とテンス・アスペクトに関わる問題点

感情動詞は、町田(1989: 42)によれば、発話時点の感情の存在を表すためには常にテイル形を伴わなければならない「継続動詞」に分類されており、本稿の3語(句)にもこの記述は該当する。

(1) 私はハラガタツテイル / アタマニキテイル / ムカツイテイル。

しかし、以下の例を見てみよう。

(2) ハラガタツ! / アタマニクル! / ムカツク!

(3) 私は花子の態度がハラガタツ / アタマニクル / ムカツク。

(4) 太郎は \*ハラガタツテイル / ?アタマニキテイル / ?ムカツイテイル<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 各語(句)の前に付けられた \* はその語(句)を含んだ文が容認されないことを表し、<sup>?</sup>はその語(句)を含んだ文が非文ではないが容認度が落ちることを表す。

(2)(3) は共に 1 人称感情主が自分の感情を報告する例であり、(2) のように基本形単独で発話時点の感情の存在を表すことができ、また (3) のように対象を伴って基本形で発話時点の感情の存在を表せる。以上の例から、この 3 語(句)は町田の指摘通りの性質と、(3) のような町田の指摘とは別の性質も持っていることがわかる。つまりこの 3 語(句)は動詞の性質上は「異なる」(例: 「A と B は性質が異なる」)のような状態動詞と連続性があり、さらに品詞上は「悲しい」のような感情形容詞と連続性があると思われる<sup>2</sup>。また (4) は 3 人称感情主「太郎」の感情を他者が見て述べている文であるが、「ハラガタツ」は「ようだ/みたいだ/らしい」のような成分を伴わないとほぼ非文に近く感じられ、「アタマニクル、ムカツク」においてもそのような成分を伴った方がより自然に感じられる。このように人称の問題を含めて考えると、町田の指摘では十分ではないことがわかる。

また、以上の例から、以下の点が問題として残される。それは、「同じ 1 人称感情主である (1) と (2) の文の差は何か」という点、また、「3 人称感情主の場合、なぜ (4) のように語(句)によって容認度に差が生ずるのか」という点である。以下ではこれらの問題を解決すべく柳沢 (1994) の「テイル形の「報告性」と神尾 (1990) の「なわばり理論」を援用し、妥当な説明を試みる。

#### 〈2〉 テイル形の「報告性」(柳沢 1994)

柳沢 (1994) の「テイル形の「報告性」」の概念は金水 (1989) の「報告」に基づくものである。よってまず金水の「報告」について簡単に説明する。

金水は、日常的対話で聞き手にある状況を知らせる行為またはその言表を「報告」と呼び、小説や物語などのないいわゆる「語り」とは区別している。その上で動詞「悲しむ」を例に挙げ、「悲しむ」が表す状況を「a 〈悲しい〉という心的状態、b 悲しげな表情や動作、c 「ああ、悲しい」などの発語行為」という 3 つの相の重なりとして捉え、その「報告」について次のように説明する。

「我々は a を直接知ることができない。しかし、bc は外部から観察可能である。(「山田はひどく悲しんでいた」または「山田はひどく悲しんでいる」という文で)報告されていたのは、b および/または c ということになる。逆に言えば bc が観察されれば「悲しんでいる(た)」と報告してもよい、ということである。」(同: 125)(括弧内の下線は引用者による補足)。

以上が金水の「報告」の概略である。金水自身は、ここでテイル形の機能について特に言及していないが、柳沢はこの記述に着目し、「直接知ることのできない〈悲しい〉という心的状態を外部から観察可能であれば『テイル』で報告できる」という「テイル」の意味(機能)は、従来言わ

<sup>2</sup> この 3 語(句)が感情形容詞と類似したふるまいをすることは、補語にガ格を伴い、「X は Y がハラガタツ/アタマニクル/ムカツク」の構文の形を取る(→本文 (3))ことからわかる。本稿では紙面の都合上紹介できなかったが、この 3 語(句)は補語にガ格およびニ格を伴うものを取るものが実例で確認されている。

れてきたアスペクトの意味にはなかったものだと主張し、この「テイル」形に対し、「報告性」という意味を提案している。そして以上の金水の「報告」を踏まえ、テイル形を以下のように定義する。

【テイル形の定義】

- (5) ① 話し手は何らかの現象を観察している。  
 ② 言表は観察結果の報告である。  
 ③ 言表は二次的な情報である。

柳沢は②の「観察結果の報告」を、単に五感によって得た情報を述べるというだけでなく、観察によって得た情報を頭の中で処理した上で述べるということまでを意味する、つまり、テイル形は、言表が何らかの形で処理された二次的な情報であるということの意味する(同: 171)(下線部は引用者による)のだとする。

以上の柳沢の記述を本稿での「報告者」を使って言い換えると、「報告性」を持つテイル形を使用するという事は以下のように定義づけられる。

テイル形を使用することとは、報告者が観察の結果、「(頭の中で処理された情報を)事態の成立が確実なもの」として報告することである<sup>3</sup>。

〈3〉「なわばり理論」(神尾 1990)

神尾(1990)の「なわばり理論」での観察の中心は、与えられた文または語句がどのような状況<sup>4</sup>で自然に用いられるかあるいは用いられ得ないかという点にあり、日本語文では、話し手の領域にある情報に関しては「直接形」、聞き手の領域にある情報に関しては「間接形」が用いられるとしている。「なわばり」という語を用いれば、自分のなわばり内のことは直接形で表現可能であり、なわばり以外のことは間接形を用いないと言えないということである。神尾は、テイル形が直接形に入るのかどうかについては明言していないが、日本語の心理文の例としてテイル形の文が挙げられていることから、本稿では神尾の「直接形」は基本形だけでなくテイル形も含んだものとして考察する。また、「ようだ/らしい」の成分を神尾は「間接形」と述べているが、これをモダリティの一部と考えることも可能である。しかし「ようだ/らしい」をモダリティとして扱うと、神尾の言う「直接形」もモダリティに含まれることになる。従って本稿では報告者による報告の際、テイル形が「報告者によって認知された確信度の高い情報」を表すものとし、そ

<sup>3</sup> 本稿では「報告性」をテイル形の持つ性質の1つと捉えているが、今後他のモダリティ形式「ノダ」「ワケダ」の性質とも比較しながら、この「報告性」がテイル形に固有のものであるかさらに検討してゆく必要がある。

<sup>4</sup> 「この場合の『状況』とは、ある文の前後に生ずる文によって形作られる談話あるいは言語的文脈と、談話の場面、話し手または聞き手の意図、知識、心理状態などを広く含む非言語的文脈の双方を含めた総体である。」(1990: 8)

表 1

各 語 感情主の人称	ハラガタツテイル	アタマニキテイル	ムカツイテイル
1 人称	○	○	○
3 人称	×	△	△

れ以外の間接形を必要とする場合は「報告者による確信度が低い」ことを表すものとする。よって本稿ではテイル形を「直接形」とし、それ以外の成分を「間接形」とする神尾の立場を支持する。

また、本稿では「間接形」を以下のように定義する。その際、「みただ」も「間接形」に含めるものとする。

「ようだ/みただ/らしい<sup>5</sup>」等の間接形とは、「報告者にとって、直接形で述べられるほど情報の確信度が強くない時に用いる表現」を指す。

#### 〈4〉 テイル形の「報告性」による各語(句)の容認度

本項では前項で考察したテイル形の「報告性」と「なわばり理論」を基に各語(句)のテイル形の容認度を確認する。結果は表 1 のようになる。尚、表中の×は間接形がないと容認されないことを、また△は間接形がなくても言えるが、間接形を伴った方がより許容度が上がることをそれぞれ示す。

#### 〈5〉 ここまでのまとめ

それではここまでの考察のまとめを以下に述べる。まず 1 人称感情主の場合、3 語(句)は基本形単独および補語を伴った基本形で自分の感情を表現できることは既に見た通りである(→(2)(3))。しかしまた 3 語(句)は問題なくテイル形で自分の感情を報告できる(→(1))。では両者の差は何か。繰り返し述べるが、「テイル形を使用することとは、報告者が観察の結果、(頭の中で処理された情報を)事態の成立が確実なものとして報告すること」である。(2)(3)の基本形の例は、感情主の感情の心的状態の表出を表しており、当然のことながら感情主にとって知り得ることである。これに対し(1)は「私がハラガタツ/アタマニクル/ムカツク」という心的状態をもう一度自分の中で捉え直して、それを事態として他者に報告していると言える。それゆえ臨場感

<sup>5</sup> むしろこの 3 語が意味的に等価なわけではない。柴田(1982: 87-94)は「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」の 3 語を「推量を表す助動詞」として分析している。この場合、推量とは〈事態の確信度についての判断すること〉を意味する。ヨウダとラシイについての記述をまとめると概ね次のようになる。ヨウダはラシイに比べ、〈事態と話者との心理的距離が近い〉。また推量の根拠については、ヨウダの方がラシイよりも〈根拠の事実性が高い〉。つまりラシイは〈事態と話者との心理的距離が遠く〉、〈根拠の事実性が低い〉ことになる。また柴田は「ヨウダに近い意味の助動詞にミタイダがある。」とし、「ヨウダに近いと言っても、ミタイダは、ヨウダに認められた〈判断〉がきわめて微弱にあって、むしろ『描写的』である。」と 2 つの語の共通点・相違点を述べている。また、推量の根拠はヨウダと同様、〈確実性が高い〉としている。

としては(2)(3)の方が強く出ており、(1)のテイル形を用いた方は自分の感情を客観的に述べている印象を受ける。

次に、3人称感情主の場合であるが、これは表1で確認した通り、語(句)によって容認度に差が出る。まず「ハラガタツテイル」はテイル形のみでは報告できず「ようだ/みたいだ/らしい」のような間接形を伴わないと明らかに容認されない。このような表現は、神尾のなわばり理論の考えを援用すれば、感情主のなわばりである「内」から捉えられた怒り」の表現であると言える。つまり、「ハラガタツテイル」感情主の感情は報告者のなわばり以外の領域にあるため、報告者は間接形を用いないと報告できないのである。他方、「アタマニキテイル、ムカツイテイル」は、間接形を伴った方が許容度が上がるものの、「ハラガタツテイル」のように間接形を絶対的に必要とはしない。つまり、この2つの表現は、「ハラガタツテイル」と共通した性質を持ちながらも、報告者のなわばりである「外」から捉えられた怒り」も表すことができると言える<sup>6</sup>。以上のまとめが、〈1〉で挙げられた2つの問題点への説明になると思われる。

また、〈1〉で3語(句)が品詞上感情形容詞と連続性があることを述べたが、感情形容詞は3人称感情主の感情を表す場合、必ず「がる」のような接尾辞や他の間接形を必要とする。この点と「ハラガタツ」だけが3人称感情主の場合、間接形を必ず必要とするという点は極めて類似しており、よって「ハラガタツ」は3語(句)の中でもより感情形容詞的な性質であると言える。

### 3. 個別的分析

本節では、前節までの考察を踏まえて各語(句)の個別的な分析を主に実例を通して行い、各語(句)の意味特徴を明らかにする。

#### 3-1. 「アタマニクル、ムカツク」

まず「アタマニクル」との比較に入る前に、「ムカツク」の特徴について述べておきたい。「ムカツク」は、近年一部の世代で頻繁に用いられるようになってきた言葉である。

「ムカツク」には2つの使われ方があるようである。まず1つには、上に述べたように一部の世代がちょっとしたことに「ムカツク！」と用いることが知られている<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> 馬場(2000)では怒りを表す動詞(句)計17語(句)を主に「テイル形の報告性」と「なわばり理論」を基に分類指標を設定し、各語(句)の分類を行った。その結果、17語(句)はABCの3つに分類されることが明らかになった。本稿での「ハラガタツ」はCグループであり、「アタマニクル、ムカツク」はA(例:「オコル、ハラヲタテル」)の観察記述的な性質とCの表出的な性質の両方を併せ持つBグループに分類された。詳しくは馬場(2000)を参照。

<sup>7</sup> 齊藤(1998:4)は、1997年11月からの数ヶ月にわたって、大学生、高校生、中学生、小学生1300名余りに対し、「ムカツクに関するアンケート」調査を行っており、その結果中学生の9割以上が「ムカツク」をよく使うという事実が指摘されている。

(6) 彼女が最近、仲たがいでいるグループからもらった手紙に「あんたら嫌い。ムカツく。先輩にちくっといた」と書いてあったそうです。(1999. 2. 16『朝日』)

(7) 「親がなんとなくむかつく」(『ムカツク構造』, p. 72)

しかし、この「ムカツク」は、かなり軽い感じで、嫌悪感を感じる対象に対して口癖のように用いられるいわば社会方言的な使われ方であり、従来の使われ方ではない。では次の例を見てみよう。

(8) (経済同友会「次代を考える会」が出版した本の中の)税制の項では、「法人税五〇％にはムカツく」の見出しをつけ、先進五カ国の税率をグラフで比較するなど、経済人らしい怒りをあらわにしている。(1998. 5. 29『朝日』)

(9) (福井県の県職員のカラ出張のうち、4億円を県民の税金を投入することになったことに対し)福井市で農業を営む男性(四九)は「もともとカラ出張をした金も税金。税金を投入するのは二重取りをされているようで不愉快。」同市の主婦(二八)は「汗水流して払った税金が使われることを見聞きするたびに、むかついてきた。こんな方法しかなかったのか。県民として納得できない。」(1999. 9. 1『朝日』)

以上の2例は、決して軽い気持で使われているのではない。「法人税五〇％」や「カラ出張に県民の税金を投入」という納得のいかなない事態に対するかなり強い嫌悪感の表れであり、このような用法が従来からの「ムカツク」の用法である。一方、先に述べた一部の世代で頻繁に用いられる「ムカツク」は、その「ムカツク」対象に「親・友人」など、直接人間を取り得、さらにかなり些細なことも「ムカツク」対象になり得る点が特徴だと言える。また「ムカツク」を頻発することにより、その時々嫌悪感を処理しようとする感じを受ける。以上のように、「ムカツク」には従来の使われ方と、一部の世代に頻繁に用いられる一種の社会方言的な使われ方が混在していると言える。

また「ムカツク」は次に挙げる例のように心理的嫌悪感の他に生理的嫌悪感も表せる。

(10) 二日酔いで胸がムカツク。

(11) (人気アニメ番組「ポケットモンスター」を見た小学生)二年男子(八つ)は妹(六つ)と一緒に画面から約五十センチの近さで見ている、番組終盤で胸がむかついて吐きそうになったという。(1997. 12. 17『朝日』)

(12) 「胃腸は健全な時にはあることさえ気が付かない。胃腸の存在を意識するのは、痛むかむかつくか、具合の悪いときだろうが。」(1997. 7. 13『朝日』「平成30年」)

以上のような、感覚である生理的嫌悪感を感じるプロセスと感情である心理的嫌悪感を感じるプロセスは並行的であると言える。「二日酔いで胸がムカツク」と「あいつのものの言い方にはムカツク」の2例で考えてみよう。

「二日酔いで胸がムカツク」という時には、前の晩酒を飲み過ぎて酒を身体が受けつけず、酒を

思い出ただけでも吐き気がする状態、すなわち生理的「ムカツキ」を表している。一方「あいつのもの<sup>9</sup>の言い方にはムカツク」という時には「あいつ」のもの<sup>9</sup>の言い方は生意気であり、感情的に受けつけず嫌悪感がする状態、すなわち感情的「ムカツキ」を表している。

以上のことより、もともと身体感覚であった「ムカツク」が、感情を表すことに転用されたと考えることができる。すなわち両者の関係は、生理的に「ムカツク」ことと感情的に「ムカツク」ことという両者の類似性に基づく比喩—隠喩(メタファー)—的關係だと言える。初山(1997: 31)はこの類似性に基づく比喩—隠喩(メタファー)—の定義を以下のように述べている。

隠喩(メタファー): 二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。(下線および括弧内は引用者)

初山の定義に即して今一度述べれば、「ムカツク」の2つの嫌悪感の関係は、生理的に「ムカツク」というプロセスを表す形式で感情的(または心理的)に「ムカツク」というプロセスを表していることになり、生理的嫌悪感から心理的嫌悪感へのメタファーであると言える<sup>8</sup>。

さて「ムカツク」の特徴が確認できたところで、次に「アタマニクル、ムカツク」を比較考察してみよう。まず以下の例においては両語(句)には互換性があると言える。

(13) あいつにはアタマニクル / ムカツク。

しかし、次の例を見てみよう。

(14) (頼んでおいたプリンターを店に取りに行った。女子店員に「しばらくお待ち下さい」と言われ、しばらく待っていた。しかしいくら待ってもプリンターを持ってきてくれない。その上、その店員は私の目の前で他の女子店員と無駄話をしている。)私はついにアタマニキテ[\*ムカツイテ]「ちょっと、私のプリンターどうなったんですか。」ときつい口調でその店員に言った。

上の例からわかるように、「アタマニクル」は副詞「ついに」と共起するが、「ムカツク」は共起しない。ここでまず「ついに」の意味について確認してみよう。

「ついに」の意味については長嶋(1982: 170-177)で取り上げられている。その記述をまとめると、「ついに」は〈ある事態(状態)の実現に長い時間<sup>9</sup>がかかる〉〈話し手(本稿では報告者)がその事態を尋常ではないと捉えている〉〈ある事態(状態)の実現の瞬間に注目する〉という意味特徴を持っていることがわかる。このような意味特徴を持つ「ついに」と共起できる怒りの表現は、そのような感情が生起するまでにある程度の時間を要し、その感情の生起が報告者にとって容易

<sup>8</sup> 若者の感覚を分析した齊藤は、著書『「ムカツク」構造』(1998: 84)の中で「『ムカツクの本質とは何か』という問いに対する私の答えは『瞬間的に沸き上がる、やり場のない、吐き気』である。」と述べている。この記述も、生理的嫌悪感から心理的嫌悪感へのメタファーと考えることで説明がつくと思われる。また「ハラガツ、アタマニクル」も比喩的表現であるが、これら慣用語と比喩との関連についての考察は今後の課題である。

<sup>9</sup> 「この場合の『長い時間』とはもちろん相対的な概念である。」(1982: 171)



ならざることと捉えられ、怒りの生起の実現の瞬間に注目する性質を持つものである。これを(14)の例にあてはめて考えてみると次のようになる。まず怒りの感情を生起させる前に、「長い時間待たされる」という時間経過があり、さらに報告者が「平常の状態から怒りという激しい感情への変化」を認知している。また、「アタマニクル」が怒りの生起の実現の瞬間に注目した表現であることは、「アタマニクル」がタ形(「アタマニキタ」)によって、怒りのない状態から怒りが生起した瞬間を表せることから説明できる<sup>10</sup>。以上から「アタマニクル」が「ついに」と問題なく共起できる表現であることがわかる。

これに対し「ムカツク」は先に述べたように、怒りの感情よりも嫌悪感が際だった表現であり、従って、「ムカツク」から想起されるのはまず嫌悪感であり、怒りへの昇華が十分でないと感じられる。よって、嫌悪感が際立ち、怒りへと十分に昇華されていない「ムカツク」は「アタマニクル」に比べ怒りの感情は弱く、「ついに」とは共起しにくいと考えられるのである。逆に言うと「アタマニクル」は「ムカツク」に比べ怒りは明らかに強いと感じられる。それゆえ以下の例を「ムカツク」に言い換えると、怒りの程度が落ちる。

(15) 僕が週刊漫画連載中のことですが、ある就職情報誌がインタビューにきました。「転職で成功するには、企業のどこに着目すべきか」と質問しますので、僕はためらうことなく「転職する企業にしっかりとした労働組合があるかないかを調べること」と答えました。やがて掲載紙を送ってきたのですが、最も言いたかった労組の部分が削除されているではありませんか。頭に来て[?ムカツイテ]電話で理由を尋ねると、「ウチの得意先に労組のない企業が数多くあり、掲載しづらかった」という有様です。(1998.4.11『朝日』)

(16) (テレビ朝日の「ネイチャリングスペシャル」で、アメリカ・メキシコ国境に広がる土漠地帯の先住民部族を追ったプロデューサーの談話)現地の人々との時間の流れの違いは特に印象的だった。「一日二十四時間という単位で生きていない。約束をすっばかされて頭に来た[?ムカツイタ]こともあったが、そのうちこの方が自然かと思えるようになった」(1996.6.25『朝日』)

(17) (大学入試センター試験で、旧課程を勉強した浪人生向けの旧数学2の平均点が、現役生向けの数学2・Bの平均点を約20点下回った)長野県飯田市の男子浪人生(一九)は新課程で受験したが、「旧課程で受験した友達の多くは、あきらめて志望校を変えた。頭に来る[?ムカツク]けど、いまさらどうにもならない」と話す。(1997.2.26『朝日』)

<sup>10</sup> ここでのタ形は過去を表すのではなく、「感情の生起していない状態から生起した状態への変化」を表すものとして解釈する。尚、過去を表さないタ形については堀川(1991)、山岡(1998)を参照。

## 3-2. 「アタマニクル、ハラガタツ」

以下の例のように、両語(句)には互換性が見られる。

- (18) つい最近のこと。酔った席で、中高時代からつきあいのある友人を殴ってしまった。近寄ってきてあれこれ口出しをしながら、こちらが何か返すと「それはお前の問題であって俺の問題ではない」と退ける友人の理屈っぽさと不遜な態度に、腹が立った [アタマニキタ]。(1999.7.26『アエラ』)
- (19) 出張で東京に来ている。そのことをタクシーで話すと、「私、二本松ですよ」と、運転手さん。ひとしきり話に花が咲いたが、ふとハンドルを切りながら、「それに比べて東京の生活はさあ...」。目的地まで東京の「悪口」が続いた。空気や水、住宅と、確かに生活環境は悪いだらう。交通渋滞も頭に来る [ハラガタツ]。「東京は私のふるさとなんですよ」とは言えずに車を降りた。(1997.10.1『朝日』)

では次の例を見てみよう。

- (20) (和歌山市園部のカレー毒物混入事件で娘を亡くした鳥居芳文さん)「食中毒と言われたの信じて、娘に十分なことをしてやれなかった自分に腹が立つ [??アタマニクル]」と芳文さんは今も悔やむ。(1999.7.18『朝日』)
- (21) (全国高校野球和歌山大会での向陽高校の有北選手の談話)「五回無死一塁で打席に立った。初球に犠牲バントを試みたが、ファウルになった。ベンチに向かって手を合わせてあやまった。きちんと決められない自分に腹が立った [??アタマニキタ]」。(1999.7.17『朝日』)

以上の例からわかるように、「ハラガタツ」は「自分」を容易に対象に取り得るが「アタマニクル」は不自然である。つまり「ハラガタツ」は「自分」を対象にし、自己への戒め(または内省に伴う怒り)として使うことが可能であることがわかる。また「ハラガタツ」には感情を抑えようとする自己が意識され、感情を表出しようという自己と抑えようとする自己との葛藤が感じられる表現とも言える。このように自らを怒りの対象にし、他者、あるいは他のものを対象として必要としない点は「ハラガタツ」に特有の特徴である。

これに対し、「アタマニクル」には感情を抑えようとする自己は意識されず、専ら感情を対象に向けて表出させる目的に用いられる表現だということになる。つまり「アタマニクル」は自己への戒めや内省を伴う怒りには不適當であり、感情を生起させる誘因は自分ではなくむしろ外部にあると考えられる。

また前節で、「ハラガタツ」は「内から捉えられた怒り」であり、3人称感情主の感情を表すには間接形を伴わなければならないが、「アタマニクル」は「ハラガタツ」のように必ずしも間接形を必要とせず、「外から捉えられた怒り」としても用いられることを述べた。これは「アタマニク

ル」が「ハラガタツ」とは違い、自己の内部での葛藤がないため感情の表出が単純でストレート<sup>11</sup>であり、それが顔の表情や声や言動に現れることによって他者から認知されやすいためだと思われる。そのため「アタマニクル」の方が怒りの感情としてやや強く感じられるのであろう。

さて、「ついに」との共起であるが、「ハラガタツ」は「アタマニクル」に比べ許容度が落ちると感じられる。

- (22) (頼んでおいたプリンターを店に取りに行った。女子店員に「しばらくお待ち下さい」と言われ、しばらく待っていた。しかしいくら待ってもプリンターを持ってきてくれない。その上、その店員は私の目の前で他の女子店員と無駄話をしている。)私はついにアタマニキテ[?ハラガタツテ]「ちょっと、私のプリンターどうなったんですか。」ときつい口調でその店員に言った。(= (14))

上の例は、私が「アタマニクル」までには、しばらく待たされた上に目の前で無駄話をしているところを見せられ、その結果、女子店員の態度が許せなくなり怒りが一気に高まったことを表している。これに対し「ハラガタツ」は心中の怒りの状態を表すことに焦点が当たっている表現であり、たまった感情を一気に表出させることは意味していないので「ついに」と共起させると許容度が落ちると思われる。

### 3-3. 「ハラガタツ、ムカツク」

最後に「ハラガタツ、ムカツク」を比較してみよう。まず、以下の例では「アタマニクル」同様、両語(句)に互換性があると感じられる。

- (23) あいつにはハラガタツ / ムカツク。(→ (13))

しかし「ムカツク」は「ハラガタツ」とは違い、「アタマニクル」同様「自分」を怒りの対象に取りにくい。

- (24) (和歌山市園部のカレー毒物混入事件で娘を亡くした鳥居芳文さん)「食中毒と言われたのを信じて、娘に十分なことをしてやれなかった自分に腹が立つ[??ムカツク]」と芳文さんは今も悔やむ。(1999. 7. 18『朝日』)(= (20))

先にも述べたが、「ムカツク」は嫌悪感を顕著に表すのが特徴である。よってそのような嫌悪感は概して外部に対して向けられるものであり、「自分」には向けられるものではないと思われる。従って「自分」を対象には取りにくいと考えられる。

### 3-4. 意味特徴のまとめ

「ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク」の意味特徴は以下のようにまとめられる。

<sup>11</sup> この印象は松本(1999)の「アタマニクル」のイメージであるが、筆者の直感も松本のイメージと類似している。

「ハラガタツ」

〈心中の怒りの状態を専ら表す〉〈直接人を対象に取る〉〈「自分」を怒りの対象に取り得、内省的〉

「アタマニクル」

〈怒りが「ムカツク」より強い〉〈直接人を対象に取る〉〈「ついに」と共起し、怒りの生起の実現の瞬間に注目する〉

「ムカツク」

(I) 〈生理的嫌悪感を表す〉

(II) 〈直接人を対象に取る〉〈怒りへの昇華が十分でなく、心理的嫌悪感が際だつ〉

(II) の心理的嫌悪感は、(I) の生理的嫌悪感からのメタファーによって成り立っている。

#### 4. おわりに

本稿では怒りの直接表出表現である「ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク」を分析の対象とし、先行研究の諸概念を踏まえて、感情動詞に関わる問題を整理し、その上で3語(句)の性質および意味特徴を明らかにした。今後は補語と3語(句)との関わりについて考察し、その結果を意味記述に組み込んでいきたいと考えている。

#### 付 記

本稿は平成12年1月に提出した修士学位論文の一部を加筆・修正したものです。

#### 実例採集

『朝日』: 朝日新聞記事データベース (Digital News Archives for Library).

『ムカツク構造』: 齊藤 孝 (1998) 『ムカツク構造——変容する日本のティーンエイジャー』, 世織書房.  
インターネット上で公開されているホームページ(検索エンジン goo).

#### 参 考 文 献

- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわばり理論』, pp. 4-142, 大修館書店.  
 金水 敏 (1989) 『「報告」についての覚書』『日本語のモダリティ』(仁田義雄・益岡隆志編), pp. 121-129, くろしお出版.  
 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』, pp. 5-220, ひつじ書房.  
 倉持保男 (1986) 『「腹が立つ」と「腹を立てる」』『国語研究論集 松村明教授古希記念』, pp. 702-720, 明治書院.  
 齊藤 孝 (1998) 『ムカツク構造——変容する日本のティーンエイジャー』, 世織書房.  
 柴田 武 (1982) 『ヨウダ・ラシイ・ダロウ』『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』(國廣哲彌編), pp. 87-94, 平凡社.

- 竹内敏晴(1997)(=1988)『ことばとからだの戦後史』, pp. 24-35, ちくま学芸文庫.
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』, pp. 139-154, くろしお出版.
- 長嶋善郎(1982)「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『ことばの意味 3 辞書に書いてないこと』(國廣哲彌編), pp. 170-177, 平凡社.
- 馬場典子(2000)「怒りを表す動詞(句)」の意味分析」『国語学会平成12年度春季大会要旨集』, pp. 62-69, 国語学会.
- 堀川智也(1991)「心理動詞のアスペクト」『言語文化部紀要』21, 北海道大学, pp. 187-201.
- 町田 健(1989)『日本語の時制とアスペクト』, アルク.
- 松本 修(1999)「キレル・ムかつく考——大阪の芸人が広めた言葉」『日本語学』Vol. 18. No. 13, pp. 139-148, 明治書院.
- 宮地 裕編(1982)『慣用句の意味と用法』, 明治書院.
- 粕山洋介(1997)「慣用句の体系的分類——隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に」『名古屋大学国語国文学』第80号, pp. 29-43.
- 柳沢浩哉(1994)「テイル形の非アスペクトの意味——テイル形の報告性」『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』, pp. 165-178, 三省堂.
- 山岡政紀(1998)「感情表出動詞文の分類と語彙」『日本語日本文学』8号, pp. 1-17, 創価大学日本語日本文学会.